

送辞

原 百 年

日高昭夫先生のご退任、心よりお祝い申し上げます。僭越ながら、同僚を代表して送辞の言葉をお送りさせていただきます。

日高先生とは約20年間、法学部政治行政学科の同僚としてご一緒させていただきました。私はもともと旧一般教養部の講師でしたが、2003年に同部が廃止され、それにともない法学部政治行政学科に所属替えになりました。その時に学科長をされていたのが日高先生でした。

その時の日高先生のイメージは、「ちょっと怖そう」、「切れ者」（良い意味で）、「ハンサム」といったものでした。毎月行われる政治行政学科会議では、日高先生が議長をされていて、いつも見事に、テキパキと議題進行をされていたのを覚えています。第一印象は「ちょっと怖そう」でしたが、実際はそのようなことはなく、皆活発に意見を出し合い、会議の雰囲気はとても良かったと思います。ただ、日高先生が一旦口を開くと、皆が急に真剣なまなざしになり、熱心に話を聞いていました。また、説明を理路整然と丁寧に行うため、説得力がありました。やはり、リーダーの器がある方だったのだと思います。

事実、日高先生は2010年4月からは法学部長、2012年4月からは副学長に就任され、大学運営を担うリーダーとしても大きな功績を残されました。日高先生が副学長に就任されたとき、「やはりな」というのが私の感想でした。古屋彦彰前理事長・学長からの信頼は厚く、前理事長・学長の右腕として大学の運営に卓越したリーダーシップを発揮し、大学の充実発展に貢献されました。

一方、教育にも熱心に力を注いでおられました。私の印象に深く残っているのは、日高先生の研究室です。日高先生の研究室にはゼミ生が学ぶテーブル・椅子があり、ゼミ生が行き来するのを頻繁に見かけました。恐らく、自らの研究室で、授業時間外でもゼミ生の指導にあたっていたのでしょう。12号館2階で学生の姿を一番多く見かけたのは日高先生の研究室でした。学部長兼副学長という重職を担う傍ら、ゼミ生指導に時間を割くのは大変なことだったと思います。

研究に関しても見事な成果を出されています。論文はもちろんのこと、行政学関連の単著を何冊も出版されています。単著を一冊出版するために、どれほどの時間とエネルギーを費やすことか、研究者であればよく分かります。教育と大学行政で大きく貢献するのに加えて、研究にも熱心に取り組む姿勢は、後輩教員として敬意を表さずにはいられません。

日高先生は、教育、研究、行政で、卓越した貢献をされてきました。そこを考えると、山梨学院理事長賞（第7回）を受賞されたのは、至極当然のことと思います。

大学は激動の時代に入りました。今思えば、「古き良き時代」を同僚として過ごせたことを嬉しく、誇りに思います。

最後に、日高先生のご健康と、さらなるご活躍を心よりお祈り申し上げ、送辞とさせていただきます。